

## 青森県立高等学校魅力づくり検討会議下北地区部会（第2回）概要

日時：令和5年12月19日（火）

13:30～16:00

場所：大湊高等学校 会議室

### <出席者>

下北地区部会委員

山本 隆悦 地区部会長、阿部 謙一 地区部会副会長、岩渕 崇 委員、  
小山内 秀樹 委員、折館 渉 委員、佐藤 俊介 委員、千葉 栄美 委員、  
野中 貴健 委員

### 1 開会

外崎高等学校教育改革推進室長から挨拶があった。

### 2 事務局説明

地区部会における検討の進め方について

事務局から、資料2及び資料2の附属資料について説明した。

### 3 意見交換

地区部会における検討の進め方について学校・学科の充実の方向性（整理案）【たたき台】について

事務局から、押さえておくべき基本的な事項等として、これまでの会議資料について説明した。

<これまでの会議資料>

- ・7/7 検討会議（第2回）資料4「学校・学科・教育制度等の現状」
- ・8/7 第1分科会（第2回）資料4 附属資料①「各校のグランドデザイン」  
資料4 附属資料②「各校の教育活動の状況」
- ・10/5 第1分科会（第4回）資料2「高等学校教育に関する意識調査（速報）」

### I 魅力ある高等学校づくりに向けた基本的な考え方

事務局から、資料3の全体構成と、「1 検討に当たっての視点」、「2 求められる力と人財像」及び「3 県立高等学校教育の方向性」について説明した。

委員から次のような意見があった。

(検討に当たっての視点)

- 記載されている内容については、納得しており、そうあるべきだと考えているが、記載されている方針を具現化するための方策に関して確認するべきである。また、これから子どもの数が大幅に減少し、地域の産業構造等が変化する時代において、子どもたちが成長し続ける環境を保障するためにも、長期的な視点を持って検討する必要があると考える。
  
- 就職した会社を途中で退職する生徒もいることから、大学進学も含め、高校卒業後の状況を調査し、その上で不足している教育を検討する視点も入れた方がよいと考える。

(求められる力と人財像)

- 1 ページの下段の○の2つ目の「大志を抱き、世界に羽ばたいていけるような心」と、2 ページの○の1つ目の「青森への理解を深め魅力を発信し、地域の発展に貢献できる人財」の記載について、矛盾していると感じるがどうか。  
→ (事務局) 大項目の2番として、求められる力と人財像という観点からで、「全ての生徒に育成すべき力」と「生徒の夢や志に応じて育成すべき力」についてそれぞれ委員から意見をいただいたところである。これらの力を備えた人財は、様々であると考えており、いただいた意見を踏まえ、2 ページ上段の3つの人財としてとりまとめたものであるため、必ずしもそれぞれの意見の方向性が一致するというわけではない。

(その他)

- 現在子どもたちは、1人1台タブレット端末を持っていることから、広範囲な調査を行うことは可能である。また、タブレットを自宅へ持ち帰ることによりその子どもたちの保護者への調査も可能となる。そうすれば、悉皆調査も可能であることから、調査対象の拡大も含め、実施方法について検討してほしい。
  
- 新制度等についてカタカナ表記が多く、理解するのが難しいため、説明を付すなどして補足する必要があると考える。
  
- 5年後と10年後では状況が大きく変化していると考えますが、本検討会議ではどの時期における高校の魅力づくりについて検討しているものか。  
→ (事務局) 現在、第2期実施計画を令和5年度から9年度まで、5年間の計画期間で進めているところであり、本検討会議では、計画期間終了後の令和10年度以降の県立高校の在り方について検討していただくものである。
  
- 今後の方向性等には、令和10年度以降ではなく、令和5年度から9年度までの間にどのように対応していくかが記載されているものもあると思うので、令和10年度以降を見据えて検討していく必要があると考える。

## Ⅱ これからの時代に求められる学科等の充実

事務局から、資料3「1 全日制課程 (1) 普通科等」について説明した。

委員から次のような意見があった。

(全体)

- 様々な学科があってよいと思うが、高校卒業後を見据え、進学や就職といった次のステージに結びつく学科が必要であるとする。
- 大人が地域に必要であるとする学科と子どもたちが求める学科とでは大きな溝があるということを常に認識しながら、求められる学科を考えていく必要があるとする。
- (事務局) そのようなことも踏まえ、高校教育に関する意識調査を実施しているため、参考資料として活用してほしい。
- むつ下北地域において、令和9年4月1日の高校入学生は約500人、5年後には約400人、10年後の令和19年には約300人になる見込みである。  
このような状況の中で、現在の学科が将来的にベストであるとは限らないことから、学科の組み合わせに関して、常に検討を行いながら、もっと柔軟に考える必要があると考えている。
- むつ下北地域は、地域完結性が求められている地域であり、子どもたちが学びたい学科が地域になれば学ぶことができないことから、地域の中でニーズに即した学科の在り方や学科の組み合わせに関して検討していく必要があるとする。
- 大切なのは、子どもたちの将来に直結する科目の充実である。科目が資格取得や進学、就職につながり、子どもたちの将来を具体的に支えるものであればよいとする。
- 少子化が進んでいる時代において、各校が魅力化を図り生徒を奪い合うのではなく、これからは、学科の統合や組み合わせが大切になってくる。  
ICTの導入等、時代が変わっている中で、令和10年度以降の生徒数の大幅な減少を見据えて、どのような学校・学科が必要かということ話し合う必要があると思う。
- (事務局) 第1分科会では学校・学科の充実、第2分科会では学校配置を検討することとしている。この第1分科会では、学科の必要性やどのような形で学科の魅力化を図るかということ議論していただきたい。

事務局から、資料3「1 全日制課程（2）職業教育を主とする専門学科」と「（3）総合学科」について説明した。

委員から次のような意見があった。

（全体）

- むつ下北地域には、現在のところ商業科、水産科、看護科等がないが、このような学科があれば、そこに進学する生徒もいると思う。これらの学科を求めて他地区の高校へ進学する生徒もいるため、本地域にも多様な学科があればよいと思っている。
- 子どもたちがむつ下北地域の高校にない学科を希望する場合には、本地域から離れて下宿等に入り他地区の高校に通学するような状況になっている。本地域で、現在設置されていない学科の増設は必要であると考えている。

（工業科）

- 11ページの「ア 成果」の【進路志望への対応】に、「早期に進路決定ができています」と記載されているが、早期に進路決定しているのは、学校の進路指導の結果によるもので、生徒が本当に就職したいところへ就職できていないのが現状である。保護者や生徒が求めているのは、就職率100%ではなく、離職・退職者がゼロとなる進路指導であるため、この「早期に進路決定ができています」という文言は、適当ではないように感じる。

事務局から、資料3「2 定時制課程」及び「3 通信制課程」について説明した。

委員から次のような意見があった。

（定時制課程）

- 以前は、勤労学生や学力が低い生徒が主に入学していたが、現在は、中学校時代に不登校だった生徒がほとんどである。入学理由としては、高校卒業の資格を取りたいというのが多い。  
普通科や専門学科とは別に、教育の一つの居場所として、むつ下北地域には定時制課程は必要であると考えます。
- 定時制課程の生徒は、キャリア教育を学校以外のアルバイト等で培っているため、学校では普通教育をしっかりとやっていくことが大切である。普通教育も専門教育につなげる架け橋として充実させていくことが大切であると思う。

- 私立高校に半年だけ通っていた生徒が県立高校への転入ができず、その後、高校へ行かなくなったということを聞いたことがあり、様々なハードルがあるかもしれないが、そういう生徒を助けられる制度があればよいと思う。
- 転入や編入をするためには単位を持っていないといけないという規定があり、1年次の途中だと単位認定が行われていないため、認められなかったものとする。
- 自分が進学する高校を選ぶのは、大切な分岐点であることを中学校できちんと教える必要があると考えている。
- 定員に空きがあると、私立高校を退学した生徒を受け入れられないかという問合せがあるが、現行の制度では難しい。ただ、絶対にできないわけではなく、一家転住やいじめ等の本人の理由によらない場合や本人がその高校に在学できない状況であれば、編入を許可する場合もある。
- 編入する際に、修得単位の関係でうまく編入できず卒業までに1年ですむところが2年かかるといったことは、学校現場でも実際に起きており、どのような制度がよいのか様々な意見が出る。一方で、編入の自由度を高めてしまうと、学校が合わないからすぐに編入するといった生徒も出てくる可能性がある。
- 定時制課程としても受け入れる際には、修得単位を重視する。編入する生徒が少なければ、最短で卒業できるように校長の承諾を得て個別指導を行えるが、実際には編入する生徒も多いことから、公平性の観点から個別対応が難しくなっている。

(通信制課程)

- 定時制課程の課題として、編入生が修得科目によって、通常であれば2年で卒業できるところが3～4年かかってしまう。この課題は、カリキュラム上難しい部分もあるため、むつ下北地域に通信制課程の高校があってもよいと考える。

### Ⅲ 多様な教育制度

事務局から、資料3「1 中高一貫教育」、「2 全日制普通科単位制」及び「3 総合選択制」について説明した。

委員から次のような意見があった。

(全体)

○ 多様な意見が出ているが、現在の教員配置や財政面を考えると、本当に実現できるのか疑問である。財政面を考えずに教員数を増やすことができれば様々な制度の導入は可能であると思うが、実現可能かどうかはあとで判断するということか。

→ (事務局) 今回は、魅力ある高校づくりのために、学校・学科の在り方を検討しているところ。

(総合選択制)

○ むつ下北地域において、中高一貫教育及び全日制普通科単位制は既に実施しており、総合選択制だけが未実施の状況である。本地域は、地域完結性が求められると考えていることから、少ないクラス数で様々な科目を学ぶことができ、大学科を超えた学びが可能となる総合選択制を導入してほしい。

### Ⅳ 各校の特色ある教育活動の充実に向けた取組等

事務局から、資料3「1 特色化の推進」、「2 多様な主体との連携の推進」及び「3 小規模校における教育活動」について説明した。

委員から次のような意見があった。

(ICTの活用による教育環境の充実)

○ 26ページの「ウ 遠隔授業の留意点」の○の2つ目に「ICTはコミュニケーション手段の一つにすぎないことを理解して活用すべき」とあるが、カタカナで書くコミュニケーションとICT(インフォメーション・アンド・コミュニケーション・テクノロジー)に含まれるコミュニケーションではニュアンスが違うと思う。カタカナのコミュニケーションは、人と人とのつながりを表し、ICTに含まれるコミュニケーションは共有を表している。このことから、コミュニケーションの手段の一つとして記載するのであれば、SNSが正しい気がする。

→ (事務局) 文言の調整は後ほど行う。

(特別支援教育等の推進)

○ 県内全地区において、課程や校種を超えた制度として他校通級があれば、子どもたちはさらに生き生きとした学校生活を送れるとともに、県立高校の教員の負担軽減にも繋がると考える。

(多様な主体との連携の推進)

- むつ下北地域では、小・中学校に高校が訪問しているほか、大学との連携等も進んでおり、全校種を挙げて交流等を行いながら県立高校の魅力づくりに取り組んでいく必要があると考える。

(その他)

- 全国的に公立離れが進んでいる状況である。むつ下北地域には、私立高校は設置されていないが、県全体でも私立高校へ進学する傾向が強いため、県立高校として、私立高校に負けないようにという思いで魅力づくりに取り組んでいく必要があると考える。
- 大畑地区には高校がなく、高校に通学するには30kmほどの距離がある。子どもたちは、魅力のある学校に通うというよりも、家庭の負担等を考えて、通学費が安価な高校に通う。スクールバスの金額も値上げしてきており、このままでは、青森市や八戸市等の他地域に進学する生徒が増えていく。このような家庭もあるということ認識した上で、魅力ある高校づくりについて考えていくべき。むつ下北地域はこのような現状であり、課題を抱えているという認識を記載すべきだと思う。

## V 第2分科会での検討における留意事項等

- むつ下北地域から学校がなくなることは非常に大きなこと。学校がなくなるということは、学校と地域とのコミュニケーションがとれなくなることや地域の人にとっての憩いの場がなくなるということ。教育だけの話ではなく、経済や文化の衰退等に繋がっていく可能性がある。そう考えると、小規模校を残していくこともこれから考えていく必要があると思う。
- 子どもが減っている状況であるからといって、学校をなくすのではなく、ICTの活用や通学支援など様々な部分を組み合わせてアイデアを出す必要がある。様々なことを試すには、むつ下北地域はすごく向いている地域であると思う。
- むつ下北地域は課題の最先端だと思うので、チャレンジしていけば新しい形が見えると思う。10年前であれば、小規模校の存続は厳しかったと思うが、例えば県総合学校教育センターから配信を行い、その場にいる教員は教科の専門性の有無にかかわらずサポートするなど、他県の事例も参考にしながらICTを活用する方法もあると思う。現在の本県の地域校には、募集停止等に係る基準があるが、令和10年度以降は、違う見方で存続の可能性を考えていく必要があるのではないかと考える。

- 地方の自治体では、起死回生の一手として全寮制の高校を設置しているところもある。県ではなく市町村が地域の人たちと一緒にバックアップし、空き家等も活用しながら進めるなど、新たな方向性についても検討する必要があるのではないか。
  - 岩手県のハロウ・スクールや学力の高い私立高校等では、子どもたちに考えさえ全てやらせるという教育方針であるとの話を聞く。全てに当てはまるとは思わないが、このようなことを取り入れていくのも重要であると思う。
  - 大湊高校とむつ工業高校を統合して新設校を設置するよりも、田名部高校1校でもよいのではという話もある。10年後、20年後を見据えたときに、生徒数が減少していく中で、新設校を設置しても入学者がいなければもったいないように感じる。建設・解体に係る費用があるのであれば、田名部高校に集約した方がよいのではないか。そうすれば、路線バス等があるので通学費を抑制できるのではないかと考えている。
  - 知事の発言を聞いていると、教員配置等について文部科学省に要望したり、県の予算を教育費に割いたりするだろうという淡い期待があるが、知事の意向と、本検討会議方向性はリンクしているのか。
- (事務局) 教職員定数の増については、これまでも文部科学省へ要望してきているところであり、今後、更なる要望も考えられる。教職員配置については、現状様々な課題があり、これまでの会議においても意見が出されているところ。本検討会議においては、必ずしも現状を踏まえる必要はなく、各委員が思い描く理想の県立高校の在り方について御意見をいただきたいと考えている。

部会長から、下北地区部会の委員構成について、追加の必要の有無等を確認した。

委員から次のような意見があった。

- むつ市連合会PTA会長が委員となっているが、将来自分の子どもが対象となる小学生の保護者をもう一名加えるのはどうか。
- (地区部会長) 県全体でも考える必要があるため、いただいた御意見については事務局と相談の上、決定したいと思うがよい。

(異議なし)

以上のとおり、地区部会長と事務局で相談の上、決定することとした。

### 3 閉会